

注目される飼料イネ 『たちすずか』

自給粗飼料確保にむけた飼料イネ栽培の取り組み

県立総合技術研究所畜産技術センター 新出昭吾 氏

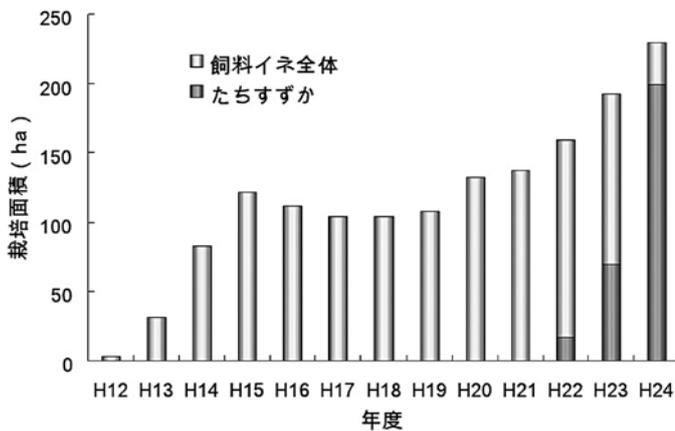


図 広島県における飼料イネ栽培面積の推移



【飼料イネの情勢】

平成12年から取組まれてきた転作田での飼料イネ生産は、近年の世界情勢、気象変動による穀物や乾牧草の高騰をうけ、補助金にも後押しされ、本県や全国でも拡大しています(図)。また、濃厚飼料の代替として飼料用米の栽培面積が急速に拡大しています。

【これまでの飼料イネ研究の状況】

こうした中で、農研機構近畿中国四国農業研究センター等との共同研究を通じて、新しい飼料イネ品種の『たちすずか』(写真)が注目され始めています。

『たちすずか』は、飼料イネ給与時に子実(モミ)がそのままの状態では排せつされる栄養的ロスや繊維の消化性が悪いという問題点を解決できる品種として、平成20年度に育種され、以後、当畜産技術センターで、飼料特性などの解明試験を行ってきました。

平成21年度には、従来普及品種『クサノホシ』に比べ、『たちすずか』は、①収量が安定して多いこと、②倒伏がほとんどないこと、③糖含量が高いこと、④給与で子実排せつ量が抑制できること、⑤繊維の消化性が格段にすぐれること、⑥収穫適期幅が広いことなどの画期的な特長を持つことが明らかになりました。

さらに、平成22年度から、当県の「研究成果普及促進事業」を通じ、17haで栽培を行い、栽培者としての耕種農家と、利用者としての畜産農家から共に高評

価を得て、平成23年度には70haへと栽培を拡大しました。

平成24年度には、集落法人や農家での栽培実証、給与実証や研修会を通じ、従来品種からの転換や追加が行われ、飼料イネの栽培面積の9割にあたる200haまで『たちすずか』は拡大しています(図参照)。本年度の収穫は概ね終了しましたが、一部で、βカロテンを低下させるために遅刈する肥育牛用の収穫が残されている現状です。

【今後への期待】

来年度にむけて、農業技術センターや農業技術指導所と協力して「たちすずか」の栽培利用に関するマニュアル作成が行われます。そこで、いち早く、マニュアルに掲載される『たちすずか』の栽培法や飼料特性、乳牛や肥育牛への給与に関する情報を紹介していきます。

「たちすずか」は消化性や栄養価が高くTMRの構成粗飼料としても優れており、今後の乳牛や肥育牛へのTMR供給に期待できます。

アジアモンスーン地帯に適性の大きい飼料イネ、特に、「たちすずか」の栽培、給与を通じて、地域における耕畜連携が益々強固なものとなることを期待しています。



健康状態を手軽に把握！ 「検温」の有効性を再認識してみませんか

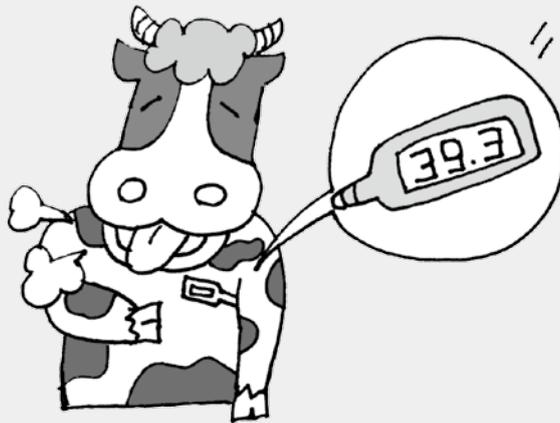
ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社中国支店 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

酪農における永遠の課題とも言える事項が、一年一産を目的とする繁殖成績の安定化です。近年は移行期管理の重要性が謳われ、分娩前後のエネルギーバランスを整えることが繁殖成績改善のカギとして強調されています。そのようなことから多くの酪農家さんは繁殖成績の向上を栄養の改善、つまり『エサ』に求める傾向が強くなっている感があります。繁殖を栄養の観点から考えることは大切ですが、繁殖成績向上のためには、栄養状態を整えて良質な卵胞を発育させ、発情回帰を早めるだけでは『十分』です。繁殖成績向上を受胎率向上と言い換えると、その受胎の為に良質な卵胞とともに、清浄化した子宮が必要です。よって分娩後の子宮を早く正常な状態に回復させ、子宮蓄膿や内膜炎の発症を防ぐことも、発情回帰の早期化と同様に重要で、その対策も併せて行う必要があるのです。

と称しますが、この原因のほとんどが分娩時の子宮への細菌感染によるものです。そのようなことから近年は、分娩後の状態把握のための手軽で有効な手法として体温の測定が見直されつつあります。

根拠農試の調査では、分娩後十三日間において四十七%の牛に三十九・四℃以上の発熱が認められたといえます。「Dairy Japan」誌掲載の農場データでは、分娩牛の四十七%に三十九・三℃以上の産褥熱が認められ、その後の追跡調査では健康牛の空胎日数が百七日だったのに対し、熱発牛は百二十九日と延長していました。また他の報告での分娩後百五十日における比較では、健康牛は六十%の牛が受胎していたのに対し熱発牛では三十七%と、総じて熱発牛は繁殖成績が悪化する傾向にあります。



しかし産褥熱を発生した牛でも、直ちに抗生剤投与など適切な処置を施せば、健康牛と繁殖成績に差は認めなかったという報告があります。よって分娩後は牛の外見に異常が無くとも体温を一定期間測定し、状態に応じて処置を施すことは、その後の受胎率向上に重要な意味を持ちます。

繁殖成績向上の方策として最近の風潮は、高価な添加物やサプリメントを分娩前後に給与するといった、ある意味『高度な』栄養管理に注目が集まっているようですが、一方で体温測定は簡単・手軽で費用も不必要ながらもその有効性は極めて大きく、もっと重要視されるべきだと考えます。ちなみに『分娩後』の体温測定は「産褥熱の早期発見」の手法として有効ですが、対して『分娩前』の体温測定は「分娩時期の予測」の手法として有効であることが知られています。よって分娩予定日の三日前から分娩後五日間程度の体温測定を毎日の作業として習慣化し、栄養管理との『両輪』とすることで、分娩後のトラブル回避によって、その後の受胎率がさらに向上し、繁殖成績の安定化に近づくことでしょう。